

特集

最新検査法の小児頭部画像診断への応用 Application of New Imaging Techniques to Pediatric Central Nervous System

特集を企画するにあたって

相田典子

神奈川県立こども医療センター放射線科

Noriko Aida

Department of Radiology, Kanagawa Children's Medical Center

近年、画像診断法の進歩はますますその速度を速め、画像を専門とする身にとってもめまぐるしく、追いついていくのが苦しいと感じるほどである。新しい手法が出現すると、当然のことながら人々は大きな期待を抱き、診断に苦悩している症例に是非応用したいと考えるのは理解できる。また、新しいものに対する好奇心と興味から使ってみたいと考える人がでてくるのも人情として納得できるところがある。しかし、すべての検査法は患者のriskとbenefitを考えて行わなければならないことは言うまでもなく、そのためには検査法の長所短所、さらに何が情報として得られるのかを熟知する必要がある。また特に小児に対しては、画像検査による被曝を含む侵襲にはより厳しくなければならないと考えている。

したがって、小児放射線学会誌編集部より小児神経放射線診断学に関する特集企画の依頼を受けたとき、最新の検査法の現状を、技術的視点から小児領域での実際の応用に至るまで、いいところばかりを強調するのではなく限界や短所

にも踏み込んでその道の専門家に書いていただきたいと考えた。私の考える専門家とは、実際に第一線でその検査を動かしている人のことである。5つのテーマを選び、執筆をお願いしたところ幸いにも全員から快諾をいただき本号の特集としてまとめることができた。技術革新の著しいヘリカルCTとマルチスライスCT、小児の頭部検査として欠かせなくなったMRA、脳の代謝の領域を反映し得る核医学に関しては、日本を代表するそれぞれの第1人者の先生方がご執筆下さった。Functional MRIとMRI、XeCTを用いた血流定量に関しては北米の2つの大きな小児病院のpediatric neuroradiologistから原稿をいただくことができた。なお英文の論文には、少しでも読者の皆様の理解にお役に立てばと考え、私が抄録を和訳して付記させていただいた。

本特集が、これから新しい検査法を取り入れていこうと考えている先生方に、ひいては中枢に起因する疾患を持つ患児のために少しでも役に立てば幸いである。